

『アシスタント』と移民小説

田江安廣

(1991年10月15日 受理)

The Assistant and Immigrant Fiction

Yasuhiro TAE

The Assistant (1957) は Morris Bober というロシアからの移民1世を扱った作品でありながら、Malamud と同じユダヤ系作家 Philip Roth から社会性が希薄だという趣旨の批判を受けている。Roth は *The Assistant* が Malamud の最高傑作だと評価しながらも、*The Magic Barrel* (1958) や *The Assistant* に描かれたユダヤ人はニューヨークやシカゴのユダヤ人ではなく Malamud の “invention” だとし、Malamud の登場人物たちは “a timeless depression,” “a placeless Lower East Side” の住人たちだと断ずるのである。また、登場人物たちの苦しみは文化の違いからくるものではないと指摘している。¹⁾

Malamud と同じユダヤ系作家 Roth の指摘にはそれなりの重みがある。しかしながら *The Assistant* には移民の生態が全く描かれていないわけではないし、文化の違いからくる葛藤も全く見られないわけでもない。本論は Roth の批判を念頭に置きつつ、*The Assistant* を移民小説として読み直し、作品のユダヤ性を探ろうとするものである。

I

Allen Guttman によれば、1882年から1914年までにアメリカに移住した東欧系ユダヤ人の数はおよそ200万人にも達する。²⁾ これら移民1世や2世の手になる自伝や小説は当然のことながら主人公の祖国の描写から始まるものが多い。Mary Antin の自伝 *The Promised Land* (1912)、Abraham Cahan の小説 *The Rise of David Levinsky* (1917)、Anzia Yeziarska の短編集 *Hungry Hearts* (1920) 等、いずれも祖国の描写から始まる。一方、Malamud の *The Assistant* は同じ移民1世を扱いながら祖国の描写は少ない。しかし祖国ロシアでの Morris が描かれた部分はそれなりの重要性を持っている。Irving Howe の *World of Fathers* (1976) は東欧系ユダヤ人のアメリカ発見、祖国からの脱出、アメリカ到着、新天地での苦境を描いた浩瀚な書物であるが、この中で Howe は移民たちの受けたカルチュア・ショックを3つの要因に分けて説明している。その第1が急激な環境の変化、東欧

の住み慣れた片田舎からアメリカの都市への移動である (“a physical uprooting from the long familiar setting of small town life in Eastern Europe to the wastes and possibilities of urban America”).³⁾ Howe の言う “physical uprooting” (根こぎ体験) は Morris がロシアでの少年時代を回想し、現在の環境と比べ合わせる場面に見出すことができる。

As a boy, always running in the muddy, rutted streets of the village, or across the fields, or bathing with other boys in the river: but as a man, in America, he rarely saw the sky.⁴⁾

ここに見られるのは戸外で自然と戯れる少年 Morris と大都市のゲッターに閉じ込められた初老の男 Morris の際立った対照である。旧世界は自然、透明なイメージで描かれるのに対し、新世界は閉塞し、不透明な、くすんだイメージで描かれる。Oscar Handlin の *The Uprooted* (1973) によれば、移住以前の彼らは自然と接触し、自然から離れて暮らすことはなかったのであり、木や牧場、星、火、水、雲、そして石ですら存在感を持っていたのである。⁵⁾ むろん、新しい生活を求めてアメリカに渡ってきた祖国での彼らの生活を美化するのは危険であるが、代々、先祖がどこに葬られているのかが歴然としている shtetl の生活から大都市への急激な環境の変化は、どの移民にとっても適応のための障害だったことは想像に難くない。同じく移民の生態を扱った Michael Gold の *Jews without Money* (1930) にも祖国とアメリカとの環境の違いに触れた部分がある。一家でブロンクス・パークに出かけたとき、主人公 Michael の母 Katie は公園の緑に感動し次のように叫ぶ。“I'm happy in a forest! You American children don't know what it means! I'm happy.”⁶⁾ Marcus Klein はその著 *Foreigners* (1981) の中でこの場面に触れ、移民たちの渴望していたものは金というより彼らの奪われた “garden” であったと述べている。⁷⁾

II

アメリカに上陸した移民たちは英語を学ぶことから始めねばならなかった。英語を修得することは紛れもなく同化の手段であり、Alfred Kazin の自伝中の言葉を用いれば “the ladder of advancement”⁸⁾ であった。David Levinsky はナイト・スクールに入学し、後に彼の片腕となる彼の英語教師 Bender から英語を学ぶ。*Jews without Money* に登場するやくざ Harry は英語を学ぶ必要性を次のように説く。「ここじゃ金儲けはできる。だが、まず英語を話すことから始めなくちゃならねえ。俺はいつもユダヤ人に言って聞かせてんだ。英語を勉強しな。アメリカ人になるんだ。」⁹⁾

Morris も英語を生きるための手だて、また教育だと考えている。彼は夜学に通い、ドイツ語と英語を勉強するが、長続きせず、ため息まじりに Frank に次のように言うのである。“Without education you are lost.”¹⁰⁾ 教育なしではおしまいだという Morris の言葉には深い侮恨の響きがあるが Morris の言葉をまつまでもなく、ユダヤ人の教育重視は伝統的なものである。Mary Antin は自

伝の中で「男の子に教師をつけないでいるのは、家族にとってばかりか遠い親類にとっても大きな恥であった」と述べている。¹¹⁾ また、Howe は *World of Our Fathers* の第7章を“The Restlessness of Learning”と名づけ、ユダヤ人の学問への献身を次のように述べている。“All through the late nineteenth and early twentieth century learning came to seem almost magical solution for the Jews, a people that has always placed an enormous faith in sheer power of words.”¹²⁾ ユダヤ人は“people of books and words”なのである。

移民の1世が2世に託する希望は計り知れないものがあつた。1世が2世に託する期待の大きさは例えば Kazin の *A Walker in the City* (1951) の中の次の言葉を見ればよく分かる。

It was not for myself that I was expected to shine, but for them — to redeem the constant anxiety of their existence: I was the first American child, their offering to the strange new God; I was to be the monument of their liberation from the shame of being — what they were.¹³⁾

自らの人生を失敗だつたと考える Morris には息子に希望を託そうにも Ephraim は死んでもういない。息子に対する期待が大きいだけに Ephraim の死は大きな痛手だつたに違いない。Morris は息子の死後外出することもほとんどなくなり、Ephraim の夢を見ては涙を流し、夢の中で「心配するな。立派な大学教育を受けさせてやるからな」¹⁴⁾と述べるほどである。

教育重視とともに家族の持つ重みも無視することができない。社会学者 Nathan Glazer は「ユダヤ人はアメリカのどの集団よりも家族中心であり、成人してからも家庭の外に出る比率は他のアメリカ人より少ない」と述べている。¹⁵⁾ Roth もユニークな自伝の中でユダヤ人にとっての家族の意味を半ば揶揄的に次のように述べている。

In our lore, the Jewish family was an inviolate haven against every form of menace from personal isolation to gentile hostility. Regardless of internal friction and strife, it was assumed to be an indissoluble consolidation. Hear, O Israel, the family is God, the family is One.

Family indivisibility, the first commandment.¹⁸⁾

Roth のいう家族の“indivisibility”は、1世、2世、3世へと世代を経るごとにその連帯が弱まり緊張と分裂をはらむようになる。学校、通り、劇場、ギャング、店、異教徒の世界にさらされたとき、家族のようなデリケートな存在はこれを引き裂こうとするさまざまな力に抗する術を知らなかったと Howe は述べている。¹⁷⁾

The Assistant は Howe の観察をどの程度反映しているのであろうか。2世の Helen はどの程度アメリカナイズされ、アメリカの価値観の影響を受けているのであろうか。1世の両親と2世の Helen にはどのような軋轢が存在しているのだろうか。

Helen がある程度アメリカナイズされているのは、彼女が異教徒である Frank との結婚を考えていることによって知ることができる。

He wasn't for instance, Jewish. Not long ago this was the greatest barrier, her protection against ever taking him seriously; now it no longer seemed such an urgently important thing — how could it in times like these? How could anything be important but love and fulfillment? It had lately come to her worry he was a gentile was less for her own sake than for her mother and father.¹⁸⁾

Glazer が述べているように改革派の人たちでさえ異教徒との結婚には反対であった。¹⁹⁾ Guttman によれば1908年から1912年までの期間のニューヨークでの“intermarriage”は全体のわずか1.7%であったが、1930年代には5%を示す地区も出始めた。1957年までに国勢調査によれば7.2%がユダヤ人でない配偶者を得ていることが分かった。ワシントンでは11.3%、1954年のサンフランシスコでの比率は37%であった。そして正統派ユダヤ人にとって「シクセ」との結婚は宗教的には死にも等しいのであると Guttman は述べている。²⁰⁾ 即ち、ユダヤ人男性が異教徒の女性を妻にめとめることは母親の影響が父親より大きいことから、そう考えられたのである。いづれにしても Helen がユダヤ人でない Frank との結婚を考えていることは彼女がアメリカナイズされていることを示しているように思われる。

ひるがって考えてみれば作者 Malamud 自身がイタリア女性と結婚している。即ち、「シクセ」をめとったことになるわけであるが、*The Stories of Bernard Malamud* (1983) の序の中で Malamud は「シクセ」を妻にめとったときの父親の嘆きにふれている。しかし、この父も長男が誕生した時、お祝いに訪れ祝福の言葉を妻に与え、はじめて孫に手を触れたとある。つづけて Malamud は *The Assistant* を執筆しているとき常に念頭にあったのはこの父であり、ユダヤ人について書いているときは祝福と贖いの気持ちを込めて書いていると述べている。²¹⁾

Helen に戻ろう。Helen が異教徒 Frank との結婚の可能性を考えていることは、確かに Helen がアメリカナイズされ、ユダヤ人としての意識が薄れていることを示している。しかし、ユダヤ人 Nat と異教徒 Frank を Helen はどのように比較しているであろうか。以下の部分が参考になる。

Nat Pearl wanted to be “something,” but to him this meant making money to lead the life of some of his well-to-do friends at law school. Frank on the other hand was struggling to realize himself as a person, a more worthwhile ambition.²²⁾

皮肉なことに Helen には異教徒 Frank の方がユダヤ人 Nat よりも彼女の感性に訴えるものを持っている。Frank は異教徒でありながら Nat よりもユダヤ的感性の持ち主だと言えなくもない。

Frank は “hooked nose” を持った “gentile Jew” である。Nat にとって金と成功が人生の目的であり、教育はその手段に過ぎない。しかし、Frank は生きること、教育に対し、より真摯な飢えを持っている。Helen と同じく Frank は孤独感に苦しめられ、教育に飢えるという共通点を持っている。そのような Frank に Helen の心が傾くのは考えられないことではない。Helen の内面は未だユダヤ的な部分を残し、完全にアメリカの価値観に同化しているようには思われない。

2世 Helen と父親との関係はどうであろうか。Helen は父親をどう見ているのであろうか。Morris の葬儀の場面、Leslie Fielder によれば、この小説のクライマックスに彼女の父親に対する考えが一番よく示されている。少し長いが引用してみよう。

He's overdone it, she thought. I said Papa was honest but what was the good of such honesty if he couldn't exist in the world? Yes, he ran after this poor woman to give her back a nickel but he also trusted cheaters who took away what belonged to him. Poor Papa; being naturally honest, he didn't believe that others come by their dishonesty naturally. And he couldn't hold onto those things he had worked so hard to get. He gave away, in a sense, more than he owed. He was no saint; he was in a way weak, his only true strength in his sweet nature and understanding. He knew at least what was good... People liked him, but who can admire a man passing his life in such a store? He buried himself in it; he didn't have the imagination to know what he was missing. He made himself a victim. He could, with a little more courage, have been more than he was.²³⁾

Helen はこの場面で父親の美点、善良さ、やさしさ、正直さを理解しながらも、同時に正直さがこの世ではとりも直せず弱点となっていることに気付いている。ここで Helen はやさしい批判の気持ちで父親を見ているのである。たしかに Helen にとっての父親はやさしさと正直さだけがとりえの人生の敗北者だったに違いない。Morris 自身も自らの人生を振り返って、自分の人生は失敗だったと痛切に認識する部分がある。しかし、うらびれたゲッターのうだつのあがらない店で一生を淋しく終えた Morris は、金を尺度として考えれば確かに敗北者であるが、人間としての実直な生き方を考えると、Julias や Sam のような人物たちよりも優れた人物として、作者によって描き出されている。

母親 Ida と Helen との関係はどうであろうか。Ida にとって娘 Helen との関係は結婚問題が中心である。Ida には娘 Helen の結婚は経済的な安定をもたらしてくれるユダヤ人の男性と同義語である。異教徒との結婚は問題外である (“the college was not the synagogue, a B. A. not a bar mitzvah”).²⁴⁾ Ida の実利的な物の考え方は伝統的なユダヤ人の考え方に沿っているらしい。彼女にとって女性には学問はそれほど必要なものではない。読書に耽る娘を見て、Ida は “Some people want their children to read more. I want you to less.”²⁵⁾ と不満をこぼす。むろん女性は知識では幸福は買えない。

結婚が学問に優先するという含みである。

Ida の女性観は Howe の著書の “Girls in the Ghetto” と題されたセクションを想起させる。ユダヤ人社会における女性の地位は低く、文学や学問によって独立しようとする希望を持った女性は早晩、両親の反対にあったらしい。Howe はいくつか例を挙げているが、その1つが作家 Anzia Yeziarska である。彼女の処女作が出版されたときの父親の態度はどうであったろうか。Howe は次のような父親の言葉を引用している。「妻でも母でもない女はいないも同然だ。」²⁵⁾ Mary Antin は幸いに進歩的な考えを持つ父に恵まれていたが、自伝の中で、女性は「女性用に作られたイデッシュの助けを借りてヘブル語でお祈りができ、意味がとれればそれで教育はおしまいである。もしロシア語で署名ができ、算術が少し、また婚約者の両親に手紙が書ければ上出来だと考えられた」と述べている。²⁷⁾

このように見てくると、Yeziarska の作品に1世と2世との確執が扱われるのは無理からぬことだと思われる。Yeziarska は “The Fat of the Land” と題された短編で1世の Haneh Breineh と2世の子供たちとの葛藤を扱っている。前半部では貧困に苦しむ Haneh の子供に対する愛着が描かれ、彼女は隣人に「アメリカでは金がすべてだ。金無しでは死んだも同然」と愚痴をこぼす。²⁸⁾ 後半部では望み通り金は手に入ったものの、成人した子供たちから疎んぜられる彼女の姿が描かれる。彼女はゲットのデランシー通りから裕福なリヴァーサイド・ドライブへ引っ越したため隣人たちとのつながりは薄れ、今は成功して完全にアメリカ人になりきろうとしている子供たちにとっては恥ずべき存在である。子供たちは母親をひとかどのレディに見せようとするが、娘 Fanny の言葉を用いれば、どんなパリ仕立ての服を着せてもお里が知れてしまう。アメリカ人になりきろうとする子供たちの中で窮屈な思いをして生きている母親にとっては、苦勞して育てた子供たちは今は “stranger” にしか見えない。Norman Podhoretz の自伝 *Making It* (1967) にも同様の描写がある。作家、編集者として成功し、異教徒のライフ・スタイルに馴染んでいる私を見る母親の目つきは “strange creature” を見る目つきであったと Podhoretz は回想している。²⁹⁾

Helen と両親との関わりには、“The Fat of the Land” に述べられているほどの軋轢は感じられない。なるほど “goy” とつきあう Helen を見て母親は嘆き悲しみ、Helen も両親の経済状態を恥ずかしく思いはするが、その軋轢はそれほど大きなものとは感じられない。Morris がユダヤ的習慣に固執しないし、Helen も普通の2世によく見られるように120%アメリカ人になろうとしないからである。両親が Helen を見るまなざしは “strange creature” を見るまなざしではない。

ここで再び冒頭の Roth の批判に戻ろう。Roth は *The Assistant* の社会性の希薄さを批判したが、この作品にはユダヤ人以外の様々な職に従事する様々な国からの移民たちも描かれているし、ユダヤ系移民が聖書のように扱ったとされる *Jewish Daily Forward* や Malamud の親類も関係していたユダヤ劇場、ユダヤ人のためのラジオ放送番組、葬儀のための組合、ロシア移民の飲む紅茶などがさりげなく書き込まれている。また、Roth は Malamud の描く登場人物たちの苦しみは文化の違いからくるものではないと述べているが、Walter Shear は “Culture Conflict” という論文の中で伝統的

なユダヤ人の価値観とアメリカの成功崇拜との2つの異なる価値観が登場人物たちに軋轢を創り出し、それが絶え間ない混乱と当惑と重荷の原因となったと述べている。³⁰⁾ そしてこの移民たちの体験した急激な価値観の変化が Howe の言うカルチャー・ショックの第2の要因なのである。Howe はこれを “a severe rupture from and sometimes grave dispossession of the moral values and cultural supports of the Jewish tradition” と呼んでいる。³¹⁾ Malamud の作品においてはこの価値観の対立はユダヤ的価値観を貫く Morris とアメリカの materialism に同化した Sam や Julias との対比としてあらわれる。また、Shear によれば Breitbart という疥癬病みのあわれな行商人が多くのもので文化的葛藤を体現した人物ということになる。³²⁾

以上述べてきたように、*The Assistant* には必ずしも社会的側面が全く欠如しているわけではない。また、ユダヤ人のゲットー全体の雰囲気がいわば Morris の店に凝縮して表現されているとも言えよう。Morris の店を包む悲しみとメランコリーの雰囲気がそれである。悲しみとメランコリーの雰囲気はゲットー特有の雰囲気であり、Kazin はこれを “damp sadness of the place”³³⁾ と呼び、Gold は “ghetto melancholy” と呼んでいる。³⁴⁾ Morris の店がゲットー全体の “social sentiment” を表現しているのである。

III

Philip Roth は自伝の中でアメリカ人としての自己とユダヤ人としての自己は識別不能だと述べている。³⁵⁾ 同じく Malamud もバリレヴューインタビューの中で、自らをユダヤ人でありアメリカ人であると規定し、ユダヤ人について書くのはユダヤ人が彼の想像力を刺激するからであると答えている。つづけて彼に影響を与えた作家として Aleichem や Peretz よりも Hawthorne, James, Twain, Hemingway を挙げている。³⁶⁾

ユダヤ人としての意識は Malamud の文体にあらわれている。Howe の言う “Englished Yiddish and Yiddished English”³⁷⁾ には当然 Malamud も含まれているであろうが、この “a new and astonishing prose style” はアングロ・サクソン系の作家たちから批判を受けた。Howe によれば純潔な英語の擁護者だと自ら任ずる K. A. Porter はこのような文体を “a curious kind of argot, more or less originating in New York, a deadly mixture of academic, guttersnipe, gangster, fake-Yiddish, and dull old worn out dirty word — an appalling bankruptcy in language, as if [these writers] hate English and are trying to destroy it” と非難し、Gore Vidal も独特の “Mayflower voice” で “with each generation American prose grows worse, reflecting confused thinking, poor education, and the incomplete assimilation of immigrant English into the old language”³⁸⁾ と批判している。

Malamud の文体について Philip Rahv の要を得た説明があるが³⁹⁾、ここでは Philip Roth と Cynthia Ozick の言葉を引用してみよう。Roth は Becket と Malamud を比較した後、次のように述べる。

